

わたしの京都

河野裕子

失った場所―八瀬のプール

八月の終わり近くに、島根県の津和野に行ってきた。森鷗外の旧居や墓を見るためである。津和野は日頃わたしがイメージしていた

ような町ではなかった。ゆつたりとした平地に土塀が続き、町を流れる川にはきれいな鯉たちが尾鰭を揺らめかせてのんびり泳いでいる。何かのパンフレットを見てのそんなイメージが定着してしまっていたわたしには、津和野は、別の場所だった。

津和野は山と山に挟まれた細くて小さな町であった。城下町だというのが、そんな面影はほとんどない。わたしたちが歩いた場所が、そういう場所から逸れていたせいかもしれない。森鷗外の旧居はとても質素であった。代々、津和野藩主亀井家の典医をしていたと

いう家がこうなのだから、一般の庶民はどんな家に住んでいたのだろうか。

旧居を見た後に「森鷗外記念館」を見に行つた。いろいろな展示物を見ながら、もう何年も鷗外を読んでいなかったことにわれながら驚く。『阿部一族』や『高瀬舟』など幾つかの小説は読んだはずであるのに、今はもう筋さえもおぼつかない。けれど、ふと記憶のなから浮かび上がってきたフレーズがあった。

南山の たたかひの日に

袖口の こがねのぼたん

ひとつおとしつ その扣鈕惜し (後略)

鷗外が日露戦争従軍中に作ったといわれるこの詩(「うた日記」のなかの「扣鈕」)を、わたしは長く覚え続けていたのであった。初

めて読んだのが中学三年生のとき。それから何ということもなく、ほとんど無意識のままに口遊み続けてきたのであろう。

日常のちよつとした時に、わたしたちはよく物を無くす。それも大きなものではなく、小さな何でもないものであることが多い。どこでどう、いつ無くしたのかさっぱりわからない。あちこち捜すがやっぱり出てこない。そういう時に、わたしの意識の深いところで、この「南山の たたかひの日に 袖口の こがねのぼたん ひとつおとしつ……」というフレーズが動いていたのであろう。

失ったものは、失うことにより、そこにあった時よりも、意識と身に寄り添い、懇ろな懐かしいものとなる。鷗外が無くしたものは、

袖口の金色のひとつの釦であった。鷗外は無くした釦が何年も忘れられなかった。だから、わざわざ「こがねのぼたん」と愛着をこめて、ひらかなで書いたのである。「その扣鈕惜し」という、時間がたつほどに惜しくなる人情の機微のかなしさ。

鷗外が落とした釦のことを考えているうちに、失ったものではなく、失った場所のことにわたしの思いは移って行った。ものは無くしても、見つからないだけで必ずどこかにある。けれど失った場所は、ほんとうに影も形も無くなってしまう。

わたしはこの八年ほど、比叡山山麓にある八瀬のプールに時々行って泳いでいた。フリーの会員であるから、好きなときに行って好きなだけ泳げる。今から思うと不思議なプー

ルであった。時間帯のせいか、わたしが行くお昼頃にはたいてい誰もいない。コースは六コースあり、五と六のコースは潜水用でかなり深い。この深いコースで泳ぐのが好きだった。時々スキューバダイビングの練習をしている人が底に潜っていたりして、その人たちが吐きだす泡の上を泳いでいると、深海にいたような気がして愉快になる。

水があるかぎり、どこまでもいつまでも泳いでいける。体力のあるかぎり泳いでいける。こんなに自由な場所はどこにもなかった。わたしは泳ぎはうまくはないが、ゆつくりとなら、わりと長い時間を泳ぎ続けることができる。体の力を抜けるだけ抜いて泳げば、いつまでも泳ぎ続けることができるのだと気がついたときは嬉しかった。体育の時間が何より

嫌いで、運動はできないものと諦めていたわたしに自信をつけてくれたのは水泳であった。背泳ぎをする楽しみは、プールの天井に映る鳥の影や木々のそよぎ。布張りの天井なので、風が吹けば音がするし、上を飛ぶものの影がくつきりと映る。ガラス越しに見える庭には、桜が咲き秋には桜紅葉が美しい。開いた窓からオニヤンマが飛んできたこともあった。笹の葉っぱが侵入しているプールサイドにヤスデがいたこともある。全体におおまかで野性的なところが、わたしの性分にあっていた。

二月の雪の降る日に、傘をさして一時間かけて歩いて通ったこともある。高野川に吹雪く雪が暗く明るく、傘のなかに一人いる自分がよその世に行く者のようで、歩く時間はそれなりに楽しかった。四月から五月にかけては、比叡山のなだりのあちこちに、山桜や山藤の花が夢のように咲く。

広いプールを独占して好きなだけ泳いでいられた閑雅な時間。至福という言葉はあのよゆうな時間と場所のことをいうのであろう。一年前、八瀬のプールは突然閉鎖になってしまった。関連会社の京福電鉄が、二度も事故を起こしたあたりをくつたのだという噂を聞いた。

(かわの・ゆうこ「塔」選者)